



利益追求と村での協調意識
—ペルー、カハマルカ県のチーズ生産者の実践を事例に—

古川 勇気*

The Profit-Seeking and the Cooperative Awareness Shared in the Village:
Case Study of Cheese Producers' Practices in Cajamarca, Peru

FURUKAWA Yuki*

Abstract

The purpose of this paper is to clarify relations between cheese producers' profit-seeking in the market and the cooperative awareness shared in a village in Cajamarca, northern mountains of Peru, from two point of view. One point of view is a broad meaning estimate included of an ideology and a custom of dairy social relations in the village, and the other is a balance calculation for their profit-seeking in a payment of milk and a commodities trading.

Cheese producers buy milk produced by peasants in the village. Their relationships with peasants are various. For example, they greet and have chats with peasants every day. In addition, they sometimes exchange foods and daily commodities and lend money to peasants, and peasants demand them to pay more than the regular weekly price of milk. In the rural festival they offer their household labour to organize it and sell beer instead of rising the price. They try to maintain their management based on the balance calculation of costs and benefits, to take care of the ideology and the custom in the village, and sometimes to work hard to be generous spending money and household labour. Thus, their caring and working hard present their generosity in the daily relationship with peasants, and hide their profit-seeking, as a result enable them to make a profit.

キーワード：利益追求，互酬性，農民，気前の良さ

Keyword: Profit-Seeking, Reciprocity, Peasant, Generosity

* 東京大学総合文化研究科：Graduate School of Arts Sciences of the University of Tokyo ,3-8-1, Komaba, Meguro, Tokyo, 153-8902, Japan / rising-sun02@hotmail.co.jp

はじめに

南米ペルー共和国（以下、ペルー）の北部山地カハマルカ県の山村における農民のチーズの生産販売は、既存の社会関係を基盤とした近隣農民からの生乳回収に基礎を置いている。山村では村人たちは全員貧しいという共通認識がある故に、富は周りに還元すべきだという「富の平準化」のイデオロギーが強く存在するといわれている [cf. Wolf 1957, 1959]。したがって、他人に対して富を還元する＝気前よく振る舞う行為は、農民一般に好意的に評価され、振る舞われた相手に何らかの行動を促す慣習にもなる。一方で、チーズの生産販売は市場交換を前提とした経済行為であり、近隣農民からの生乳提供と代金の支払いを基調に「利益追求の実践」¹⁾をおこなわなければならない。問題は、村内においてチーズ生産者は、社会的な「良き村人」としての振る舞いと市場での利益追求の両方を共におこなわなければならないということである。さらに彼らの実践を通して、農村社会と市場の関係性が具体的に議論できる。両者の関係については、本節の後半でみるように既に多くの指摘がなされてきたが、大半の先行研究は市場を村外の影響として捉えている。対して本稿では、村の中で生活し、商売もおこなうチーズ生産者の実践を、2つの側面から分析する。第一に、近隣住民との日常的な社会関係に対して、彼らがおこなう山村でのイデオロギーや慣習を含めた広い意味での計算である。第二に、生乳代金の支払いや商品売買での利益追求に関して、彼らがおこなう貨幣のみによる単純な収支計算である。このよくある単純な枠組みで整理することにより、先行研究とは異なり、村内における市場との関わりが追究でき、新たな農民像の提起が可能である。そこで本稿は、彼らの村で共有される協調意識と市場での利益追求とはどのような関係にあるのか。さらに、彼らはどのように社会規範と市場原理とを接合しているのか、を明らかにする。

とりわけラテンアメリカにおいて、農村社会や農民の営為について重要な指摘をしてきたのが農民 (peasant) 研究である [Wolf 1957, 1959; Foster 1965, 1972; Taussig 1980; Gudeman and Rivera 1990; Deere 1990; 木村 1997; Gudeman 2001, 2008, 2012; Mayer 2002; 鳥塚 2009]。古典的な研究では、農村社会の文化的な内実が論じられ、その中で「限られた富」のイメージを巡る議論に典型的な、富の平準化のイデオロギーの存在が指摘されてきた。ウルフは1950年代のラテンアメリカ農村社会を次のようにまとめる。当時の農村社会は物理的に都市と離れており、村人の都市までの移動が頻繁でなく、その地理的状况に

1) 本稿ではチーズ生産者の利益の運用や維持の様子を利益追求と呼ぶことにする。利益追求といっても、彼らはコストーベネフィットの合理的計算による利益極大化行動をとるものでなく、彼らは高収入の生産販売の基盤である生乳回収に関わるリスク削減をおこなうが、収入拡大の好機があればそれに参入するものである。このように彼らの生産販売の基本は収入の維持とリスク削減にあるが、収入拡大の機会をうかがっているという点で、利益追求を目指すものとする。

加え、農村内では村人が一様に「貧しさ」を共有していた。そのような農村社会は、いわゆる「閉じた」共同体 (the Closed Corporate Peasant Community) と呼ばれていた [Wolf 1957: 1-2]。そして貧しさの共通認識から、農村では富を持つものは周りに利益を還元すべきという富の平準化のイデオロギーがあった。彼のメキシコとグアテマラの先住民コミュニティに関する民族誌では、そのイデオロギーについて、儀礼や祭りにおいて富を持つものは食料や現金などを提供することで、神からの加護が得られると考えられており、その提供のおかげで、農村内で富が独占されず、豊かなものから貧しいものへと循環すると述べられている [Wolf 1959: 216-218]。

フォスターは、「限られた富 (Limited Good)」のイメージを巡る議論を通じて、この方向の議論を展開させた。フォスターによると、農村においてある者が富 (土地や財から様々な価値まで) を持つ場合、その者は周囲から妬まれ、その妬みによって富の突出が阻害されることがあり、農村内では、富が限られているため、その所有を均質にしようとする協調意識が村人の間でみられる。こうした認識を、彼は「限られた富」のイメージと呼んだ [Foster 1965]。彼の別の研究では、このイメージに照らし合わせると、農村社会は他の誰かの出費によって誰かが利益を得ているという、ゼロ・サムゲームの状況にあると指摘されている [Foster 1972: 169]。すなわち、農村内では利益追求とそれを規制する周囲の協調意識とが存在することが示され、両者は対立するもののように描かれている。

他方、同様の現象を「気前の良い振る舞い」による動員として捉えることもできる。アンデス農村では、他人に対して富を還元する＝気前よく振る舞う行為によって相手の行動を促す慣習が報告されてきた。この気前の良さを示す行為は、例えばアンデス南部高地における守護聖人の祭り運営の際によくみられる。細谷の報告では、祭りの運営組織はメンバーに様々な仕事を分担し、その中で最も多くの労を担わされたものは、その多大な出費や労力から個人では遂行不可能であるため、様々な人間関係を駆使して務めを果たしている。ただし、援助を依頼するにはフルカと呼ばれる一定のルールがあり、援助をおおぎたい相手のもとの酒、ココアの葉、パン、果物などの贈り物を持って行き、その贈与は相手の助力を請うための手土産となるといわれている [細谷 2004: 244-245]。このフルカという慣習は、手土産という形で気前の良さを示すことで、こちらの意図通りの相手の助力を促すものである。

この富の平準化のイデオロギーと気前の良さを示す慣習は、異なる観点からではあるが、市場経済の影響に対する、農村社会の相対的独立性を前提にした議論である。

このような古典的な研究の視点は、農村への市場経済の浸透が進むにつれ、批判的に検討されるようになった。ローズベリーは、各地の農村へ市場経済が浸透し、農民は出稼ぎや賃金労働に高く依存するため村外・国外への越境が頻繁になり、都市と農村間の人々の移動がますます活発になってきたと指摘する [Roseberry 1989: 122-126]。このように村人の営為は

流動的になり、次第に農村自体もいわゆる「閉じた」共同体ではなくなってきたため、古典的な研究が農村の内実について、経済とは異なった、文化的要因のみから論じることはもはや困難になっている。

では、「閉じた」共同体論がほとんど通用しなくなってきた状況はいかに扱われてきただろうか。農村への市場の浸透による社会変化が無視できない地域では、市場経済と農村との関係性が研究されてきた [Gudeman and Rivera 1990; Deere 1990; Gudeman 2001, 2008, 2012; Mayer 2002; 鳥塚 2009]。グードマンとリヴェラは、農村は農民世帯が節約の経営をおこなう領域で、市場は村外に出た個人が利益追求をおこなう領域であると、両領域を区別し、市場での利益追求を村外のこととしている [Gudeman and Rivera 1990]。さらにグードマンは、農村社会の互酬性と市場交換の関係性について、ボランニー²⁾を援用して両者の弁証的な関係性を様々な民族誌を参照して考えると、村外の市場の領域では、社会関係を基盤としてその上で市場交換が成り立っているという [Gudeman 2008: 95-123]。そしてグードマンの近年の研究では、村での世帯経営や世帯間の交換は神（自然）からの生体エネルギー循環するものと考えられ、農村内はコスモロジーを共有する領域で、その外部に市場経済の領域が置かれている [Gudeman 2012: 71]。このようにグードマンの研究は、農村と市場の相互関係と部分的な重なり合いを指摘するものであるが、市場の領域における社会との関係に議論が限定される傾向が強く、農村での市場交換の関係については主題的に扱われていない。彼の場合、村外のものとしている市場交換との関わりを、本稿では、村内において議論する。

またグードマンらは、農村を一種市場とは隔絶した独自の領域として描いている。彼らの議論が正しければ、村内では市場交換の影響は存在するが、古典的な研究が議論したイデオロギーや慣習の状況も今でもみられるはずである。例えば、本稿の事例の山村では、村の中で農民が現金を獲得する手段は限られており、村内において収入を上げることは難しいことである。そのため、村人のほとんどは相対的に「貧しい」と感じており、富を持つものは彼らから利益の還元を要求される場合が多い。筆者のフィールドワークの経験から考えても、

2) 経済活動に関する人類学的研究では、カール・ボランニーによって市場経済とそれ以外の互酬性などが歴史的形成過程から論じられた。ボランニーの議論では、19世紀に誕生した価格決定市場を市場交換とし、それは社会から「乖離した」経済として世界中に広まってきた。一方で、それまでの交換形態である互酬と再分配を「社会に埋め込まれた」経済とし、その経済とは社会的諸関係を含めた経済である [ボランニー 2003: 361-413]。この歴史過程の分析は、ある社会において市場交換と「社会に埋め込まれた」経済の双方は、概念上では重なり合う可能性を示唆している。彼の研究以降、市場交換と「社会に埋め込まれた」経済の関係は経済人類学における一大問題となってきた。彼の研究による示唆は、例えば農村内では「社会に埋め込まれた」経済がみられ、農村外のみで市場交換がみられるのではなく、農村内で両者が重なり合う可能性を提示するが故に、本稿にとって決定的な重要性を持つ。

富を持つものは周りに利益を還元すべき、または、貧しいものは施しを受けて当然という、周囲の協調意識は確かに存在しうる。

さて、ここで農村における社会関係と市場の関係性を考えるために、ラテンアメリカの研究を離れ、オセアニア研究における経済システムの接合³⁾に関する研究を参照しよう。それらの研究は、外部の資本主義経済の影響が現地の人々の実践によって「翻訳」されるという形で、市場の農村社会への影響を議論してきた。具体的には、内部（贈与）システムと外部（商品）システムを媒介するミドルマンが、外部での利益を、葬送儀礼を通じて島内に還元し、名誉や威信を得るという前川 [2000: 131-227, 2004: 79-87]、多目的貨幣の導入が贈与交換の領域を破壊することなく、むしろその領域において貨幣が資本に転化されないため、貨幣経済は在地の論理と併存し得るという風間 [2003: 230-263] などの議論である。これらの研究は、村外（島外）の市場交換の影響が、現地の人々の実践によって、利益が社会的な威信に置き換わるか、貨幣の効力が無力化するか、に翻訳されるという。この場合、研究者たちの関心があったかどうか別として、村内における市場の領域である損得計算や利益追求の性向は別のものに置き換わるか、存在しないかしている。とはいえ市場の領域を村外のものとみている限りでは、それらの計算や性向は指摘できないのではないだろうか。

最後に、以上から本稿の立ち位置を示す。本稿が取り上げる事例では、チーズ生産者が農村に住み、近隣農民から原料（生乳）を定期的買い取り、都市に売商品（チーズ）を生産している。ここで大雑把に言うと、チーズ生産者を含めて農民は農村に住んでいる限り、当該農村の社会的な状況を考慮して行動しなければならない。他方農民は、貨幣経済の中で損失を出さないためには、貨幣で計算できる部分に関して計算を常におこなわなければならない。問題は、村内においてチーズ生産者はこの両者を共ににおこなわなければならないということである。そのため、本稿では、既に述べたが、チーズ生産者がおこなう広い意味での計算と、貨幣のみの収支計算の2つの計算に焦点を当てる。そこで、次のような問題を考えていく。「限られた富」のイメージを巡る研究で論じられたように、村内の状況として、私的な利益追求と富の平準化のイデオロギーとは対立するものだろうか。言い換えるならば、社会規範と市場原理の接合はどの程度困難だろうか。その中で彼らは、どの程度「限られた富」のイメージや「気前の良い振る舞い」を考慮しているのだろうか。さらに、彼らは、いかにして社会規範と市場原理との接合を試み、どのように双方を接合しているのだろうか、本稿で論じる経験的な問いとして浮かび上がってくる。

3) これらの研究は、アルチュセールの資本主義と前資本主義に関する生産様式接合論 [アルチュセール他 1996] とは異なり、世界システム [ウォーラーテイン 1987] に対する現地（フィールド）の反応を詳細に描くことを目的とする研究である。これの研究は、事例の個々の行為者の活動や社会関係に注目し、彼らが異なる経済システムを結んでいると考えるため、本稿では参照すべき研究と捉えている。

I カハマルカ県酪農業とワルガヨック郡

ここでは、カハマルカチーズの歴史と、研究対象地であるワルガヨック郡山村の様子を紹介する。

1 カハマルカ県酪農業の歴史と現状



図1 カハマルカ県の位置
(INEI 1994 改変)

南米ペルー北部山地に位置するカハマルカの市街地は、美しい山々に囲まれた標高 2750m の盆地にある（図 1 参照）。その気候は年間平均気温 15℃と清涼で快適なものであり、平均最高気温は 20.2℃、平均最低気温は 6.1℃である。一年は雨季（10月～3月）と乾季（4月～9月）に大別され、年間降水量は約 729mm で、そのほとんどが雨季に集中している。その市街地は温泉街として有名で、歴史的遺産も多く、国内・外の観光客が訪れる街である。近年、鉱山開発の好景気の影響で街並みは大きく変わり、カジノやバー、さらに複数のショッピングモールが立ち並び、ペルー国内でも有数の地方都市となっている。同県の主要産業は観光業と鉱山産業であり、さらに国内有数の酪農地帯としても有名である。

同県の酪農業の歴史はここ 100 年くらいのものである。1917 年に、スペイン人の大土地農園であるアシエンダ (hacienda)⁴⁾ で初めて商業的な搾乳目的でウシが飼育された。スペイン人征服以前のペルーにはウシやウマ、ヒツジなどの旧大陸の動物は存在せず、ラクダ科動物のリャマやアルパカを飼育していたが、乳利用の慣習はなかったため、搾乳目的のウシ飼育はヨーロッパ文化由来のものである。次第に各地で乳牛が商業的に飼育されるようになり、バターやチーズなどが製造されるようになった。また 19 世紀末以降、サトウキビプランテーションの好景気を背景として人口を増加させていた近隣の海岸都市に対する畜産物や、後には乳製品の重要な供給地として同県は発展していった。そして 1930 年代には、乳製品の大量消費地であるリマにこれらの商品が出荷されるようになった [Deere 1990]。

それらの商品の運搬を通じて、同県の人々は移動性を身につけていった。さらに北海岸都市のプランテーションでの労働のために移動するものもあり、同県の多くの人々が北海岸都

4) アシエンダ (hacienda) と呼ばれる大土地農園は、16 世紀末～20 世紀半ばまでに中米の一部と南米諸国に見られた大農園のことである。カハマルカ県では酪農業を営むアシエンダが多く存在した。そしてアシエンダの多くは 1960 年代後半にペラスコ政権による農地改革によって解体された。

市へ移住するようになった。ディーレによると、カハマルカ県は歴史的に農民の頻繁な移住がみられたことで知られており、同県のある村では耕作地の不足から農民世帯の長男以外の子供たちが都市へ移住する慣習があり、出身地を出たものと残ったものとの関係は維持され続けているという [Deere 1990 : 187-209]。この歴史的な親族・同郷ネットワークをきっかけにカハマルカチーズの仲買人の多くが北海岸都市での販売網を形成してきたと考えられる [cf. Smith 1989]。

今日ではリマなどの都市においてカハマルカチーズは有名であり、それはスーパーマーケットやチーズ専門店、チーズ市場（いちば）で売られている。カハマルカ県を代表するチーズには、次の3種類を挙げることができる。フレッシュタイプのチーズ（queso fresco）⁵⁾と円熟タイプのティポ・スイソ（tipo suizo）⁶⁾、そして県固有のマンテコソチーズ（mantecoso）⁷⁾である。本稿は、これらのチーズの中で、研究対象のチーズ生産者が主に生産するフレッシュチーズとティポ・スイソに関して論じる。

次では、このフレッシュチーズとティポ・スイソを生産する農民とその生産技術改良を図るワルガヨック郡での農村開発の事例を紹介する。

2 ワルガヨック郡

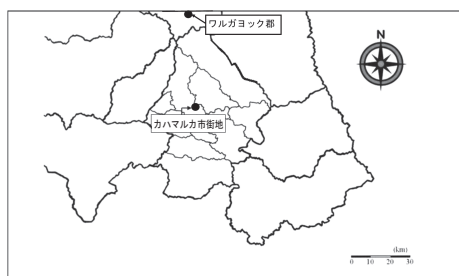


図2 ワルガヨック郡の位置
(Peisa S. A. C. 2004 改変)

カハマルカ県では、1990年代以降チーズの生産知識や技術向上を図る農村開発が実施され、市場に出回るチーズの品質の向上が目指されてきた [Bernet et al. 2001 : 186]。これは、同県のチーズ生産者の持つ昔ながらの技術や知識ではチーズ品質に問題があり、国際企業が参加する外部市場において、その技術や知識では競争に勝てないという、開発機関⁸⁾から

- 5) フレッシュチーズは、フレッシュタイプのチーズのことである。その生産方法は、生乳を35～38℃にまで温めた後、粉末状・タブレット状の凝乳酵素やカルシウムなどを加え、その後凝固した生乳（カード）を細かく切って塩を加え、型に移し替えて乳清（ホエー）などの水分を抜くことでできあがる。
- 6) ティポ・スイソは、スイスから伝わった技術で作られる円熟タイプのチーズのことである。作り方は、フレッシュチーズの作り方に似ているが、円熟期間として2週間ほど自然乾燥させる。フレッシュチーズよりも水分が少なく固いチーズであり、円熟期間を置くと、味に深みが増している。
- 7) マンテコソチーズは、ケシーリョ（quesillo）という「生チーズ」をもとにして作られるセミ・フレッシュタイプのチーズである。作り方は、ケシーリョをきれいに洗った後に、水分を抜いて乾燥させ、その後、粉砕機であるミルで細かく砕いて塩を加えながらこねて形を長方形に整えることでできあがる。できあがったマンテコソチーズは塩味のきいたチーズであるが、口当たりが滑らかで独特の風味を持つ。ちなみに、ケシーリョは生乳を温めて、粉末状やタブレット状の凝乳酵素を加えてビニール袋や型に入れて固めただけのチーズのこと。
- 8) カハマルカ県で酪農技術援助を実施した開発機関の多くは、各郡役場や区役所から依頼を受けた、国

の指摘を受けた動きである。

本稿では、そうした流れの中でおこなわれた1つの農村開発とそれに参加したチーズ生産者に焦点を当てる。カハマルカ市街地から北に約88km行ったところに、ワルガヨック郡がある(図2参照)。そこで、現地開発機関の1つである国内NGO⁹⁾によるフレッシュチーズやティポ・スイソの生産技術供与の農村開発が、2009年からおこなわれてきた。その農村開発は「世帯の収入を上げるために、品質の良いチーズを生産する」という目的で実施され、同年に32名の農民によってチーズ生産者協同組合(Red Empresarial de Productores de Queso)が結成された。その協同組合を山村ごとに、4つのグループに分割し、開発支援者は月に一度各グループで教育プログラムを実施してきた。

開発支援者はその教育プログラムにおいて、温度・時間を管理した生産方法や、以前からこの山村で作られてきたフレッシュチーズ以外の、ティポ・スイソなどの円熟チーズを生産するための技術などを指導してきた。それらの技術に習熟する中で、参加者たちがチーズ生産において時間や温度を管理するようになり、その結果、以前のチーズと比べてより品質の良いチーズを生産できると自己評価するようになる、というのが、国内NGO側の目論見であった。さらに、この教育プログラムの主要な目的の1つは、衛生面でも、また低脂肪でカルシウム豊かという点で健康面でも優れているとされるチーズを作り出すための低温殺菌処理技術¹⁰⁾を参加者に身に付けさせるというものである。ただし、殺菌処理を実施するためには、農民世帯に二重底鍋¹¹⁾を導入する必要がある。二重底鍋によって、農民が簡易で安価な方法でチーズに殺菌処理を施し、収入を上げるというのが、開発支援者の筋書きである。

本稿が集中的に論じるのは、同郡の協同組合グループのうち、LTとPBという山村にまた

内NGOか、県庁や郡役場から依頼を受けた国際NGOである。

- 9) 本稿で扱う国内NGOはワルガヨック郡の郡役場から依頼を受けて、チーズ生産技術援助の農村開発をおこなっている。同NGOはペルー北部地域において、農村の貧困問題解決のために、農村開発や灌漑整備などのインフラ援助などをおこなう組織である。ワルガヨック郡では、同NGOは30年ほど前から活動しており、近隣の鉱山採掘会社からの資金を基盤に、家畜の飼育や農業に関する技術供与をおこなっている。ちなみに、2009年からチーズ生産などの酪農業に関する技術供与がおこなわれるようになった。
- 10) 低温殺菌処理技術とは、チーズを生産する際に、はじめに生乳を63℃の低温で30～40分間殺菌する処理のこと。これが低温殺菌であり、フランスのパスツールがワインの殺菌方法として発明した病原菌をほぼ死滅させる処理方法であり、技術・設備的には最も安価で容易な殺菌方法といえる。この低温殺菌処理を施すことによりチーズの品質にも大きく2つの違いができる。その違いの1つは、衛生面への対応である。熱処理によって大半の菌は死滅し、できあがったチーズはより衛生的なものとなる。またもう1つは、健康面への対応である。60℃以上の熱を生乳に加えると、生乳の表面にタンパク質と脂肪分が凝固した薄い膜ができる。低温殺菌処理を施す場合は、大抵この薄い膜を取り除く。そうすると自然と生乳の脂肪分は減ることになる。そのため低脂肪、加えてカルシウムが豊富という健康面に優れたチーズができ、健康志向の都市の消費者に受け入れられることになる。
- 11) この鍋は内底と外底の間に水を溜めることができ、火を加えるとまずその間に溜まった水が熱せられるため、内側に入れた生乳は直接熱せられない。そのため生乳の温度を低温で維持することができ、長時間の低温殺菌処理が可能となる。

がるグループの参加者である農民の事例である。この2つの山村の総世帯数は約150世帯(総人口:約600人)であり、そのうち10世帯程度がチーズの生産販売をおこなっている。そして農村開発に参加したのが、そのチーズ生産者のうち7世帯の代表者である。参加した農民は全て、開発以前から、自身の家屋の一部にチーズ製造所を設け、各世帯でチーズを生産し、個別の販路を形成して商品を出荷する、というチーズ生産販売をおこなっており、教育プログラムを機に新たにチーズ生産に参入しようとする者はいなかった。

なお、ここでいう「山村」は、アンデス中央・南部高地の農村共同体 (la comunidad campesina)¹²⁾ と異なり、ワルガヨック郡の下に置かれる行政地区にすぎない。地区に自治権はなく、郡役場の意向通りに行政がおこなわれる。本稿が分析する国内NGOの開発も郡役場の依頼を受けたもので、地区の農民たちも農村開発を郡の行政の一環と捉えていた。また、この山村(或いはこれらの地区)に住む農民たちは、各自で土地を所有する一方、近隣の市街地や都市へ定期的に買い物に出掛けるなど、地区のメンバーではあるが生活は流動的である。さらに、家族や親戚が都市で暮らし、働いているものも多い。

筆者は山村と都市の経済的な関係性を明らかにする研究の一環として、数世帯のチーズを生産する農民の家に順次滞在し、彼らの経済活動や開発プログラムに対する考えについて聞き取り調査をし、月に一度おこなわれる開発の教育プログラムの集会の様態を参与観察する、ということを数次にわたり継続的におこなった。さらに、国内NGOのオフィスに赴き、開発支援者に対する農村開発についてのインタビュー調査を補足的におこなった。フィールド調査を実施した2013年3~7月、2013年11月~2014年1月、2015年2~3月の段階では、参加者が低温殺菌チーズ(Queso Pasteurizado)¹³⁾を生産できるようになるための教育プログラムがおこなわれ、2013年12月にはそれが終了し、各製造所に二重底鍋が導入されていた。また、事業結果として、対象の農民のうち現在(2017年9月時点)でも二重底鍋を利用し続けるものはいなかったが、彼らは教育プログラムのおかげで、質の良いティポ・スイソを生産できるようになっており、そのため収入を一段と上げている。

本稿では、調査した農民の中でも周辺情報を含むデータが充実しているという理由から、グループの7名の農民のうち、3名の事例を取り挙げる。この3名とは、グループの代表のマイコルとその兄のブライアン、フェルナンドである¹⁴⁾。

12) アンデス中央・南部高地では、農村共同体がみられる。農村共同体とは、ペルーの法律によって認められた自治組織であり、農村での土地に対して、農民は使用権を認められているが、所有権は共同体に属している。また、牧草地などが共有地であることもある。このような共同体では、自治組織としての性格が強く、農民は共同体成員でなければ土地などを利用できないという制約もある。そのため、農民は成員としての村での役割も決められており、社会的紐帯がいまだに色濃く残る共同体と考えられる。

13) 低温殺菌チーズは低温殺菌処理が施されたチーズのこと。

14) 本稿で扱う地名は仮名であり、また、登場人物も全て仮名である。

II チーズ生産者の贈与と農民の要求

ここでは、まず、ワルガヨック郡のチーズ生産者と近隣農民との収入の違いを示す。そのうえで、チーズ生産者と近隣農民と日常的なやり取りを提示し、チーズ生産者のおこなう2つの計算から分析する。

1 チーズ生産者と近隣農民の収入の違い

まず、チーズ生産者のマイコル、ブライアン、フェルナンドの3兄弟について、二重底鍋導入後¹⁵⁾の経済状況を示す(表1)。

二重底鍋導入後のマイコルたちの家計を調査した結果、彼らのチーズの生産販売による収入は約900～1600ソルであった。この収入から、彼らの近隣農民への生乳代金を引くと、約600～800ソル手元に残る。さらに、彼らの食料や日用品の購入に必要な出費や、チーズの生産販売に必要なガス・電気代やカルシウムなどの薬代が引かれると、手元に残る利益は約300～570ソルである(日本円で約10,000～20,000円)。彼らは、生乳代金や生活・チーズの生産販売に必要な経費を引いても、多くの利益を残していたのである。

15)ワルガヨック郡のこの山村のチーズ生産者は2017年9月時点でも、二重底鍋を利用していない。二重底鍋導入時点というのは、農村開発の主目的である山村での低温殺菌処理の実現に関わる教育プログラムの終了時期であり、参加者が身に付けた専門知識から収入に一段と上げた時期でもある。

表1(見開き) チーズ生産者の1週間の家計状況(二重底鍋導入後の2015年2～3月のある1週間:雨季)

チーズ生産者	1週間の牛乳量(ℓ)	牛乳の値段(ソル/ℓ)	1週間のチーズの生産量(kg)	チーズの値段(ソル/kg) (チーズの種類/出荷先)
フェルナンド (男性, 40代)	418.5	1	62.7	15 (ティボ・スイソ/リマ)
ブライアン (男性, 40代)	1050	質の良い牛乳: 1 そうでないもの: 0.9	100 40	9 (普通のフレッシュチーズ/チクライヨ) 15 (ティボ・スイソ/リマ)
マイコル (男性, 30代)	696	1	80 25.5	14 (ティボ・スイソ/バンバマルカ) 13.5 (ティボ・スイソ/リマ)

ただし、後に詳しく述べるが、彼らは周辺より多くの利益を得るが、その利益を、生乳代金を上げることで還元しようとはしない。カハマルカ県では、1930年代にネスレー (Nestlé) の子会社が設立されて以来、生乳代金は1ソル/ℓ前後を行き来していた。現在では、そのような会社の生乳代金が0.80～0.90ソル/ℓと落ち込む中、マイコルたちはほぼ1ソル/ℓで回収しているため、周辺の農民も現状の代金に納得している。また、この生乳代金はこの山村のチーズ生産者ならほぼ一律の代金である。そのため、農民はチーズ生産者に不満を持つ場合、取引相手を変更する可能性がある [cf. 古川 2015]。

次に、近隣農民の生乳提供での収入を検討する。農民は50名ほどいるが、全てにインタビューをできたわけではない。データが得られた農民のうち、代表的と思われる6事例を以下に挙げる (次頁表2を参照)。

近隣農民の生乳提供での収入は、約30～70ソルである。また鉱山労働や農業従事などでその他の収入を得る場合がある。その収入の中から食料などに必要な出費がまかなわれるため、手元に残るのは20～30ソル (日本円で約600～1,000円) か、ほとんどないことが多い。そのため、この山村の農民の多くは、チーズ生産者よりも収入が低く、相対的に「貧しい」と感じているといえる。一方、生乳提供以外に収入がある場合、400ソル近く手元に残る農民もいる。また彼らのほとんどが、ウシを1～3頭所有する程度であり、彼らの一部には一人暮らしの老人もおり、その経済状況は厳しいものである。全ての農民のデータに基づくも

の終わり) (筆者作成) ※ちなみに、ブライアンは家の一部で雑貨店を経営しており、その収入がある。

同棲する家族の人数 (人)	家畜の数 (頭)	コスト (ソル)	商店 (ソル)	収入 (ソル)	利益 (ソル)
6 (本人, 妻, 祖父母, 娘2人) ※長女は高校を卒業, 次女は小学校に通う。	雄ウシ: 2 雌ウシ: 6 ウマ: 2 ブタ: 2 ニワトリ: 10	生乳代金: $349\ell \times 1 = 349$ 1週間のコスト: 200 {30ソル(チーズ生産にかかるコスト)+ 170ソル(食料・日用品など)}	×	940.5	392.6
7 (本人, 妻, 息子2人, 娘3人) ※長女は大学に, 長男, 次女は高校に, 次男は中学に, 三女は小学校に通う。	豚: 2 ニワトリ: 10 雌牛: 3 雄牛: 6 馬: 2	生乳代金: 994 1週間の世帯消費: 240 (20ソル/1日×7日+20ソル×5人の 子供)	100	1600	366
4 (本人, 妻, 息子2人) ※2人の息子は小学校に通う。	ブタ: 2 ウマ: 0	生乳代金: 652.5 1週間のコスト: 250 {40ソル(チーズ生産にかかるコスト)+ 210ソル(食料・日用品など)}	×	1474.25	570.75

表2 近隣農民の収入状況（2013年5月調査記録より作成）

農民	家族の数 (人)	ウシの所有数 (頭)	1週間の生乳 提供量(l)	1週間の生乳提供 による収入(ソル)	その他の 収入(ソル)	1週間のコ スト(ソル)	手元に残 る 利益(ソル)
Aさん (女性, 60代)	2 (本人, 姪)	1	60	60	なし	30	30
Bさん (女性, 60代)	1	1	30	30	なし	10	20
Cさん (女性, 30代)	5 (本人, 夫, 子供3人)	3	60	60	20 (夫が畑 で働く)	80	0
Dさん (女性, 40代)	5 (本人, 夫, 子供3人)	2	70	70	600 (夫が鉱山 で働く)	270	400
Eさん (女性, 50代)	4 (本人, 夫, 子供2人)	2	50	50	100 (夫の年金)	150	0
Fさん (女性, 30代)	3 (本人, 夫, 子供1人)	1	45	45	なし	45	0

のではないが、得られたデータからはチーズ生産者その他の農民では収入にかなりの差がある。ただし、ここで得られた数字は個別のインタビューにより明らかになったもので、チーズ生産者、農民の双方は、両者の収入の差を大まかに認識してはいても、具体的な数字として知っている訳ではない。そこで、両者の経済的な差異の大まかな認識を支えている、チーズ生産者の側に生じた目に見える変化について述べておく。

チーズ生産者の生活ぶりを見ると、マイコルとブライアン、フェルナンドは農村開発に参加したことで、その生活ぶりに変化があった。マイコルは二重底鍋導入後、飼っていた2頭のウマを売って、生乳回収のために荷台付きのバイクを購入した。さらに、街道沿いの立地のいいところに引っ越し、家を建てた。ブライアンは家を増築した。また、フェルナンドは雄ウシを1頭売って、搾乳可能な雌ウシを購入し、足りない分をタンス貯金からまかかった結果、彼のウシの所有数は5頭から8頭へと増えている。これらは、生乳を提供するか否かに関わらず、山村の農民に容易に認識可能な、実体的な変化であり、農民が相対的な「貧しさ」を感じる根拠である。

農村開発に参加したことでチーズ生産者は収入を上げることができ、それが目に見える変化として表れている。チーズ生産者は近隣農民のある程度の収入を把握しているが、他方で、近隣農民はチーズ生産者の具体的な収入額は知らないが、彼らの収入が自分たちのそれよりも多いことは察している。では、次では事例を通して彼らの実践を2つの計算から分析する。

2 チーズ生産者ならではの贈与

ワルガヨック郡でのチーズ生産者は毎朝生乳の回収にまわる。生乳は牧草にタンクで置かれている場合もあるが、近隣農民が直接手渡す場合もある。後者の際には、チーズ生産者は農民と挨拶をかわし、世間話をする場合がある。加えて、チーズ生産者と農民の間では、代金の支払いと生乳の提供という交換を前提として、それとは別に彼らの日常的な付き合いの中から生まれる贈与が存在している。その日常的な付き合いの例を以下で紹介する。

まず、近隣のバンバマルカでのチーズ生産者の製造所で観察された日常的な贈与の事例を挙げる（同様の事例はワルガヨック郡では観察されなかった）¹⁶⁾。

【事例1】バターのお裾分け

バンバマルカの山村でおこなわれた農村開発のおかげで、アナ（女性、40代）は二重底鍋を利用して低温殺菌チーズを生産している。その殺菌処理の過程、鍋に入った生乳の表面に脂肪とタンパク質の凝固した膜ができる。この膜は脂肪分が多く、山村ではバター代わりに食されることがある。アナが低温殺菌をしていた時に、近隣農民（女性、40代）がやってきた。彼女は、アナに生乳を売る農民であり、このとき、アナに調味料を借りに来た。アナと彼女がしばらく世間話をした後に、アナは「今、（低温殺菌をしていて）バターができるから持っていく」ときいた。アナは鍋から掬い上げたバターをタッパーに入れて、調味料と一緒に、彼女に持たせた。

（2012年10月調査記録より）

アナの夫は別の山村に働きに出ており、子供たちは学校に通うため街に出ており、彼女は平日一人で暮らしている。彼女はバターを持っていても余らすだけであった。そのため、日頃から生乳を回収するという付き合いのある農民に、バターを持たせたと考えられる。彼女にとっては、近隣農民との調味料や日用品の貸し借りは日常的なものであり、このバターのお裾分けもよくあることである。

バターのお裾分け以外にも、チーズ生産者ならではのホエー（乳清）¹⁷⁾の提供がある。ワルガヨック郡のチーズ生産者マイコルの事例を挙げる。

16) ワルガヨック郡のチーズ生産者は、低温殺菌処理を実施するための二重底鍋を日頃から利用しているわけではない。一方で、バンバマルカのチーズ生産者は二重底鍋を日常的に利用しており、事例のようなことがよく観察される。

17) ホエーとは、生乳が凝固してカードが形成される際に上澄みに現れる水分である。ヨーグルトの表面の水分がそれである。

【事例2】ホエーの提供

チーズ生産者マイコル（男性、30代）は、チーズ生産過程で、ホエーを抜く際にバケツ2杯ほどホエーを取っておく。そして早朝、生乳回収をする際に、彼はホエーを8個のタンクに詰めて、そのタンク全てを運んで近隣農民にホエーを配っている。また昼近く、彼がカードを固めてチーズを形成する所に、農民が2,3人やって来て、彼が取って置いたホエーをもらいにやって来る。ホエーは栄養価が高いため、残飯と混ぜて、ブタの餌によく使われる。

（2013年5月調査記録より）

ホエーは農民にとって、家畜の餌として利用され、餌代がかからないため家計の補てんとなり、彼らの生活を支えるものである。しかしながら、チーズ生産者でない農民は生乳を持っているからといって、ホエーを作り出すことはできない。そのため、彼らの中には、チーズ生産者に生乳を売ること代わりにホエーを得ることを期待するものもいる。一方で、チーズ生産者にとってホエーの提供は、タンクに詰めて、そのタンクを持っていき、配るといふ、かなり労力のいる作業である。彼らはその結構な作業がかかることに文句も言わず、求める農民にはホエーを提供するのである。

チーズ生産者と農民の間では、既に代金の支払いと生乳提供という交換が成り立っている。その等価交換ともいふべき交換に加えて、チーズ生産者はバターやホエーを提供している。彼らはバターやホエーなど、日常では余らしてしまう可能性があるものを提供している。ホエーの場合、彼らはタンクに詰めて、配るといふ労力をかけており、農民はそれを期待している。この様子から、農民にとっては、それらの提供物は既に成立している等価交換に加えて、さらにチーズ生産者から労力をかけて受け渡されるものであることが示唆されている。そのため、このような贈与では、チーズ生産者はバターやホエーを気前良く提供しているが、労力を伴うものの、日常の経済的なやり取りにおいて損にならない提供をしている。一方で、農民にとっては生活を補てんする等価交換以上の贈与を受けていると推察され、農民の中にはチーズ生産者が労力をかけてバターやホエーを提供するため、彼らのことを「気前の良い村人」と認識するものも存在しうる。

この日常的な贈与を、チーズ生産者がおこなう2つの計算から考えると次のようになる。この贈与では、チーズ生産者は収支計算から経済的に損することは無いという事実を、労力をかけることで隠し、村内の気前の良さを示す慣習に従って「良き村人」として振る舞っている。その振る舞いが農民に受け入れられているため、彼らは農民からの生乳提供を確保でき、日常のチーズ生産販売での収入が成り立つのである。

3 近隣農民の要求

ここでは、チーズ生産者の収入が多いと周辺農民にそれとなく認識されているため、チーズ生産者と農民との金銭的なやり取りの独特な展開である前貸しの事例や、農民から正規の代金以上の要求を受けることがまれに生じる事例を挙げる。

まず、チーズ生産者がごく一部の近隣農民から要求される、生乳代金の前借りの事例を挙げる。

【事例3】生乳代金の前貸し

ワルガヨック郡のチーズ生産者マイコルの妻リリー（女性、30代）から、生乳代金の前借りする農民のことを聞いた。その農民がなぜ前借りをするのかと質問した際、彼女は次のように回答した。「彼女（前借りをしている農民エマ [女性、60代]）は、いつもたくさん借りようとする。高齢で、しかも子供たちもいなくて一人暮らしで、ウシを一頭しか持っていないから、お金に困っているの。だから、いつも多く（の前借り）を求めるの。」

（2013年5月調査記録より）

チーズ生産者から前借りを要求する農民は、生乳生産者のごく一部に過ぎない。そしてチーズ生産者は、農民の前借りをする理由や彼らの厳しい経済状況をきちんと把握している。それは日常の付き合いがあって成立するものであり、数字（金銭）だけのやり取りをしているわけではない。つまり相互の事情を把握したうえで成り立つのがこの前借りの関係である。

農民エマ以外にも、前借りに来る農民（女性、50代）に遭遇した時があった。農民は真っ先に自分がいま困っていることをチーズ生産者に訴えかける。例えば、子供たちが世話してくれないとか、年をとって畑仕事が大変だとかいうことを、チーズ生産者に訴えるのである。それが一通り終わった後、しばらくの間、チーズ生産者のほうから「じゃあ、代金の前貸しをするわ」と切り出すのを農民は待つ。自分から、お金を貸して欲しいと、はっきり言う場合はほとんどなく、あくまでも、チーズ生産者が好意で貸してあげるといふ形をとる。前借りの金額は、チーズ生産者の帳簿を見る限り、その農民が一週間の生乳量で払える金額内に抑えてあり、週末に貸した分を差し引いた金額が支払われるようになっている。

チーズ生産者がおこなう2つの計算から、この前貸しを考えると、彼らは貨幣のみの収支計算の結果、あくまでも週末の生乳代金の返済時に採算が合う範囲に留めている。そしてその条件を表に出すことはなく、村内での慣習から、あくまでチーズ生産者から申し出るといふ体をとることで、気前良く振る舞う「良き村人」を前面に出している。ここでは、先ほどの日常的な贈与同様に、チーズ生産者は損をしないという収支計算を隠して、日常的付き合い

いによる気前良い振る舞いを前面に押し出している。

次に、週末に採算がとれる金銭的なやり取りとは異なり、チーズ生産者が近隣農民から正規の代金以上の要求を受けた数少ない事例を紹介する。

【事例4】農民の要求

この事例はチーズ生産者ブライアン（男性、40代）のもとに、近隣農民であり、親戚でもあるラファエル（男性、40代）夫妻が週末の生乳代金を受け取りに来た場面である。

ブライアンの妻、ベティー（女性、40代）が、生乳量を記入した帳簿をみせながら、今週の生乳代金を払おうとした。すると、以下のような会話がなされ、生乳の代金をめぐってもめることとなった。

ラファエル：(メモ帳の数値を見た後に)「今週の火曜日は、130だった。」

ベティー：「いや、火曜日は10.50だわ。」

ラファエル：「いや、火曜日は130で、今週は900以上あった。」

その騒ぎを聞きつけて、ブライアンの子供たちもやってきた。実際に、早朝にラファエルのもとに生乳を取りに行ったのは次男であり、当事者である彼も、記憶を思い返しながら、「いや、火曜日は10.50だった」と議論に参加した。ほかにも、長男や次女も議論に参加して、「ちゃんと覚えて、帳簿に記入しているんだから、記録が間違っているはずはない」と、母親を擁護した。しかし、ラファエルは、ひくことはなく、「いや、この前の日も〇〇〇(帳簿よりも多い生乳量)で、今週は900以上あったんだ」と一点張りであった。それをしばらく、離れて眺めていたブライアンが、会話に入ってきて、以下のように述べた。

ブライアン：「…よしわかった。覚えていないこっちも悪いんだから、火曜日は130でもいいよ。」

それを聞いた、ラファエルは、自分の主張が認められたことをいいことに、追い風に乗って、すかさず、以下のように付け足した。

ラファエル：「いや、火曜日は150だった。なにせ、今週は900を超えていたんだから。」

彼は、どうしても90ソルの代金、つまり90ソル以上のお金が欲しいらしく、生乳量の上乗せを図った。この態度に対して、ブライアンの妻や子供たちは非難したが、ブライアンは、しばらく黙っていて、以下のように締めくくった。

ブライアン：「じゃあ、火曜日は19.5ソルでいいよ。そうすれば、今週は90ソルを超えることになるから。」

(2013年4月調査記録より)

このときは、メモ帳の記入が間違っていると指摘されて、実際に生乳収集にまわったブライアンの子供たちも交えて、大騒ぎになった。なぜなら、生乳の取引量は、メモ帳に記入してあったとしても、実際はチーズ生産者と近隣農民の記憶に依るところが大きく、なによりも両者が合意する必要があるからだ。しかし、このラファエルの事例の場合、自らの主張を突き通してブライアンが折れると、さらに要求を上乗せしてきた。そして結果、ブライアンが妥協することとなった。終わった後には、ブライアンの家族の中には不満を抱えるものも多かったが、ブライアンのとりなしで、最後にはラファエルも含めて全員でカニャッソ（サトウキビの蒸留酒）を回し飲みして、彼はわだかまりをほぐそうとした。

この事例ではラファエルが90ソルをどうしても欲しい理由があり、その意図をあからさまに表に出した。一方で、ブライアンは記憶があいまいなこともあり、その点では自分たちに落ち度があるため、ラファエルの言い分を全面的に認めることになった。加えて、ブライアンには、数か月先に、家を建て増しする計画があった。それには、大工経験があり、親戚でもあるラファエルの助けが必要であり、ほとんど無償で手伝ってもらうためには、気前の良さをみせる必要があった。そのため、ブライアンの側から見ると、ラファエルへの支払いが彼が家の増築を手伝ってほしいという意図が示唆される出費である。一方、今回の支払いはラファエルにとっては、正規の代金以上の収入である。

この支払いのように、チーズ生産者は、(時には目に見える変化で、)収入が多いと認識されているため、村での富の平準化のイデオロギーを背景に、周りから利益を還元すべきという要求を受ける場合がある。ここでの振る舞いを、チーズ生産者がおこなう2つの計算から考えると、収支計算では損をしていることになり、一方、広い意味での計算では、村には富の平準化のイデオロギーがあるため、その損を敢えて被ることで利益を還元している。すなわちこの場面では、前者の計算を度外視して後者の計算から「富を持つもの」として対応している。もし前者の計算を重視して、農民の要求を断ったらその関係は途絶えてしまい、その農民からの生乳提供は期待できなくなり、チーズの生産販売において損を被ることになる。そのため、彼は多少の出費を許すことで、農民の関係性の継続を図り、その結果得られる安

定したチーズの生産販売の継続を目論んだのである。このように、農民が多くを要求をする場合、収支計算を無視して利益を還元することで、結果として、長期的な利益が維持されることがある。

III カルナバルの祭り

ここでは、日常のチーズ生産者と農民のやり取り以外に、彼らが利益追求の好機を得たカルナバル（carnaval）の祭りの事例を挙げる。

【事例5】カルナバルの祭り

2015年2月の週末にマイコル兄弟が中心となって、カルナバルの祭りを開催した。カルナバルの祭りとは、キリスト教暦での謝肉祭のことである。カハマルカ県のカルナバルの祭りはペルー国内でも有名で、ワルガヨック郡の山村でも同祭りは2月におこなわれる慣習的な催しである。

マイコルたちは祭りの開催にあたり、郡役場や農村開発をおこなう現地NGO、その他の3軒の会社から出資を求めて回った。現地NGOは500ソル出資し、他の機関もほぼ同様の金額を出資した。彼らは、祭りでチーズや農産物のコンテストやサッカートーナメントを催し、各機関から得た出資金を賞金（賞品）にあてたり、1日目の参加者全員にふるまう昼食にあてたりした。つまり、マイコルたちはほぼ出資することなく、祭りを開催した。

（2017年8月調査記録より）

マイコル兄弟は各機関から出資金を得ることで、ほとんど現金を出すことなく、祭りを開催することができた。Wolf [1959] の指摘では、村の中で富を持つものが祭りの出資をおこなうことになっていたが、彼らは自ら出資することはほとんどなかった。ただし、祭りの会場準備や食事の提供などには大変な作業がかかるため、彼らは家族を総動員して労働力を提供している。また、そのイベント開催にあたり、彼らは外部から運営資金を集めてきた。一方で、村人たちの全てがその資金の流れを知っているわけではないが、その行為自体は相対的に「貧しい」と感じている村人を助ける営為として評価されている。すなわち彼らは、労力をかけることで、まるで利益を還元したかのように周囲に認知され、結果として、気前の良さを村人に示すことになった。

さらに彼らは、祭りを機会に利益を追求することを実現した。その事例を以下に挙げる。

【事例6】ビール販売

カルナバルの祭りの3日間に、マイコル兄弟はビールを販売した。彼らは街でビールを100箱仕入れてきて、1本4ソルで購入したものを、祭りの際に5ソルで販売した。5ソルというのは、村や街での一般的なビールの販売価格である。その結果、ビールは全て売れて、祭りは盛り上がり、彼らは1200ソルの利益を得た。ブライアンに、なぜ祭りを開催したのかをたずねたところ、次のようにこたえた。「(二重底鍋購入などで出費が多かったから、)収入向上のため、祭りを開催した(2017年8月調査記録より)」と彼は言った。

先述したように、マイコル兄弟は自身では出資不可能な資金を外部から集めてくることで、村人たちに気前の良さを示している。そして祭りは盛り上がり、ビールが完売したことから、そうした気前の良さの提示を村人がそれとして受け入れていることが示唆される。彼らのおこなう2つの計算を考えると、収支計算では損をしていないが、労力をかけることでその事実を隠し、さらに多額の資金を村にもたらすことで周囲に利益の再分配を認めさせ、広い意味での計算において、村内での慣習から「富を持つもの」として気前の良さを示している。その結果、村人たちは彼らの気前の良い振る舞いに応える形で、快くビールを購入し、彼らは収支計算での利益追求を実現した。この場合、彼らの広い意味での計算における村での気前の良さを示す慣習によって村人たちの購入が促されたことにより、収支計算におけるさらなる利益追求が実現された。

IV 利益追求と村での協調意識

本稿は、チーズ生産者の利益追求と村で共有される協調意識の関係性について、彼らがおこなう2つの計算から考えてきた。ここで、本稿の主要な論点を整理しておこう。

既に論じたように、彼らは村での富の平準化のイデオロギーや気前の良さを示す慣習を含めた広い意味での計算と、貨幣のみの収支計算の2つの計算をおこなっている。ここで、その計算の側面を整理しておく。これまでの民族誌的記述は、広い意味での計算にあたって、1) 相対的に「貧しい」と感じる農民の要求を公然化する、村での富の平準化のイデオロギー、2) 彼らが惜しみなく労力をかけることで相手の行動を促す、村での気前の良さを示す慣習、3) 彼らが貨幣によって利益を再分配することで相手の行動を促す、村での気前の良さを示す慣習、の少なくとも3点が考慮されていることを示している。一方、収支計算には、4) 目の前の損得に対する、短期的な視点からの計算、5) チーズの生産販売を維持するための損得に対する、長期的な視点からの計算、の2つの点がある。

改めてこの整理から本稿の事例を考えると、バターやホエーの贈与の場合、2)を前面に出すことで、4)で損をしない範囲で5)の利益追求を実現している。前貸しの事例では、日常的付き合いをもとに1)に依えているが、実際は4)で損をしない範囲に留めている。正規の生乳代金以上の要求の場合、1)に依えるために3)を実行し、前面に出すことで、4)では損をしているが5)での利益追求を維持している。カルナバルの祭りでは、実際は2)をおこなっているが、村人には3)として認知されたため、4)での極端な利益追求を実現した、とまとめることができる。

フォスター [1965] のような古典的な研究は、1)によるイデオロギーが農村内に存在し、とはいえ妬みを受けても富を持つものは存在するため、そのイデオロギーは4)における利益と対立し、その結果村での富の突出は阻害されるという指摘であると理解できる。対して本稿では、1)が存在する中で、2)と3)をうまく使うことで、4)と5)の利益追求が実現されていることが示されている。必ずしも利益追求と村での協調意識は対立するものでなく、村での慣習を前面に出すことで、結果として利益追求は可能である。では、彼らの実践において、どの程度社会規範と市場原理とを接合しているのか、以下でまとめる。

まず、ラテンアメリカ農民研究では、グードマンは社会と市場の領域は重なり合い、村外での市場の領域では社会関係を基調として成立すると指摘する [Gudeman 2008: 95-123] が、近年では、あくまでも市場経済は村外での事象としている [Gudeman 2012: 71]。対して本稿では、村内での社会関係と市場交換の関係性を民族誌的に示してきた。村内の彼らの実践では、社会の領域である富の平準化のイデオロギーに依えるため、気前の良さを示す慣習を前面に出して、一見すると村内には市場の領域はなく、社会の領域しか成立しないようにみえる。すなわち、彼らはイデオロギーや慣習のような村内の共通認識でのみ、その行動を判断しているようにみえる。しかしながら、その表に出ている社会的な振る舞いの裏には、利益追求を期待する収支計算も存在し、結果として、安定した生乳提供の実現や祭りでの利益追求が実現される。つまり、村内では社会の領域が表に現れ、一方の市場の領域が表の振る舞いで隠されるために、単一の領域しか存在しないようにみえるのである。そのため、グードマンのような村内において市場の領域による性向がみられないかのような議論 [Gudeman 2012: 71] が成り立ちうるのである。

そしてチーズ生産者は、農民が損失を被る要求をしてきた場合、「気前の良さ」のイメージを示す必要がある。その場合、近隣農民との関係性は金銭関係以上のものであることを示すため、彼らはあくまでも「良き村人」として振る舞うことを優先する。グードマンは、村外において社会関係を土台に市場の領域があるという関係性を指摘する [Gudeman 2008: 95-123] が、本稿では、村内においては、イメージ上、社会の領域が表に出て市場の領域は隠されている、という反対の上下関係が示されている。

では、なぜチーズ生産者は市場の領域、特に収支計算や利益追求の性向を隠さなければいけないのか。彼らが生産販売において純粋に利益追求だけを目指して富を独占するならば、周りの協調意識から反発を招き、付き合いを拒否され、日常のチーズの生産販売が成り立たなくなる。すなわち日常の商売を成り立たせるために、彼らは市場の領域である収支計算と利益追求を表に出せないのである。

そしてオセアニア地域の接合に関する研究では、外部の資本主義経済の影響が現地の人々の実践によってどのように翻訳されるかが議論されてきた。それらの研究では、資本主義市場の影響は「外部からもたらされるもの」として捉えられているため、村内の市場の領域での収支計算や利益追求の性向は、現地の人々の実践によって他のものに置き換わるか、存在しないかと議論している。対して本稿の事例では、村内においてチーズ生産者は近隣農民との社会関係を維持する一方で、商品の販売によって損失を出さない上での利益追求の収支計算をしている。そのため、彼らが独特の市場理解を持っている可能性はあるが、そうした翻訳があろうとなかろうと、上記の理由から、収支計算と利益追求の性向は隠されなければならない。隠すという行為は多大な労力と気遣いを必要として、本稿では民族誌的にその苦勞を示している。そして逆にいうと、隠す作業を施さなければならないほど、商売を成り立たせるためには、損をしないための収支計算と利益追求が欠かせないのである。

ラテンアメリカ農民研究とオセアニア地域の接合に関する研究では、市場交換は村外に位置するため、村内において利益追求の性向がないかのように論じてきた。対して本稿では、村内でチーズ生産者は市場の領域を隠しているだけで、社会の領域の裏では、着実な利益を狙う損得計算をおこなっていることを主張する。すなわち先行研究と異なり、村内における市場交換との関わりを考えると、他の村人には一応村の規範に従っているようにみえるが、実はかなり打算的なチーズ生産者像が提起されるのである。

以上がチーズ生産者のおこなう貨幣の媒介された市場交換の領域と互酬性を伴う社会の領域の接合の実践である。彼らの日常の実践では、社会の領域での「気前の良さ」のイメージを前面に出し、裏で短期的な利益よりも長期的な利益追求を成立させている。言うまでもないが、「良き村人」として振る舞うことは大変な作業であり、農村社会／市場という異なる領域はすんなり接合されるものでなく、それを実践する個人（世帯）の並々ならぬ苦勞を伴うものである。そして、彼らがそれ程市場の領域を隠すのは、日常の社会関係の裏で商品の販売において損をしない範囲で利益を狙う損得計算を着実にこなっているからである。

おわりに

本稿は、チーズ生産者の利益追求と村での協調認識とはどのような関係にあるのか、さら

に彼らはどのように社会規範と市場原理とを接合しているのかを明らかにしてきた。山村では富の平準化のイデオロギーがあるため、彼らのように富を持つものは周りから利益の還元を要求されるか、気前良く振る舞うことを求められるかする。彼らの実践では、そのような村での協調意識に対して気前の良い振る舞いを前面に出し、同時に、なるべく利益を得るための損得計算もおこなっている。このように社会と市場の領域が村落生活において重なっているが、村での社会関係において市場の領域である利益追求を表に出す行為は、周囲からその関係を拒否されかねない。そのため、彼らは「気前の良い」イメージによって社会の領域を表に出し、一方で、市場の領域を隠すが、その裏でなるべく損をせずに利益を狙う損得計算をおこなう。その結果、彼らは農村社会／市場という異なる領域を接合しているのである。

筆者には、貨幣に媒介された市場交換の領域と、互酬性を伴う社会の領域が、重なり合うものとしてある。両領域は、前者の行為をおこなっている者が後者の論理に基づいているというイメージを社会内の人々に与えることによって、重なり合うものである。その重層性を保証するのが、例えば気前の良さをイメージさせる行為である。それは、その必然的に伴う財や労働力のやり取りと、そのイメージ効果の同在により、両者を媒介する。その媒介の実践として、本稿では、チーズ生産者が気前の良さを前面に出すことで市場での利益追求を覆い隠す、その作業の大変さと、裏での損得計算を挙げている。彼らが前面で「良き村人」として振る舞うという苦労を怠らず、その裏で商売において損をしないように利益を狙う損得計算をおこなう限りでは、社会規範と市場原理との接合に成功しているといえる。

以上から本稿では、村内で周囲から一応「良き村人」として認知されているが、実はかなり打算的なチーズ生産者像が提起されうる。モラルエコノミー／ポリティカルエコノミー論争や、グローバル経済／ローカル経済の接合研究のような二項対立的な図式とは異なり、この農民像は、状況や条件に応じて、その二項の境界線を行き来する個人（個別の世帯）の実践を現わしている。その実践プロセスを民族誌的に描いた点に、本稿の人類学的貢献がある。

このようなチーズの生産販売を端緒に、より広範囲に市場での取引を含めた農村と都市の経済的関係性を示すことは、今後の課題としたい。

謝 辞

本論文の調査は、公益財団法人松下幸之助記念財団の2011年度「松下幸之助国際スカラシップ」と澁澤民族学振興基金の「平成27年度大学院生等に対する研究活動助成」の助成によって実現した。また、本論文の執筆にあたっては、東京大学大学院総合文化研究科の木村秀雄名誉教授と名和克郎教授から有意義なアドバイスをいただいた。さらに2名の匿名の査読者からは、大変的確なコメントを頂いた。何より、筆者を快く迎えてくワルガヨック郡山村の人々

には大変お世話になった。ここに記してお礼を申し上げたい。

参 考 文 献

- アルチュセール, ルイ / J・ランシエール / P・マシュレー / E・バリバル / R・エスタブレ
1996 『資本論を読む 上巻』 今村仁司 (訳), 東京: 筑摩書房.
- Bernet, T., Ortiz, O., Estrada, R. D., Quiroz, R. and Swinton, S. M.
2001 Tailoring Agricultural Extension to Different Production Contexts: A User-Friendly Farm-Household Model to Improve Decision-Making for Participatory Research. *Agricultural System*, 69(3): 183-198.
- Deere, Carmen Diana
1990 *Household and Class Relations: Peasant and Landlords in Northern Peru*, Berkeley: University of California Press.
- Foster, George M.
1965 Peasant Society and the Image of Limited Good. *American Anthropologist*, 67(2): 293-315.
1972 The Anatomy of Envy: A Study in Symbolic Behavior. *Current Anthropology*, 13(2): 165-202.
- 古川勇氣
2015 『ペルー山村のチーズ生産者——暮らしの中の経済戦略』 東京: 風響社.
- Gudeman, Stephen
2001 *The Anthropology of Economy; Community, Market, and Culture*, Malden, Mass.: Blackwell.
2008 *Economy's Tension: the Dialectics of Community and Market*, New York: Berghahn.
2012 Vital Energy: the Current of Relations. *Social Analysis*, 66(1): 57-73.
- Gudeman, Stephen and Alberto Rivera
1990 *Conversations in Colombia: the Domestic Economy in Life and Text*, New York: Cambridge University Press.
- 細谷広美
2004 「フォーク・カトリシズム——聖人崇拜とバラヨック」 細谷広美 (編) 『ペルーを知るための66章』 242-247 ページ, 東京: 明石書店.

Instituto Nacional de Estadística e Informática (INEI)

1994 *Perú, Resultados Definitivos de las Comunidades Indígenas, Departamento de Cajamarca 1*, Lima: INEI.

風間計博

2003 『窮乏の民族誌——中部太平洋・キリバス南部環礁の社会生活』岡山：大学教育出版.

木村秀雄

1997 「中央アンデス南部高地の社会経済」友枝啓泰・染田秀藤（編）『アンデス文化を学ぶ人のために』137-172 ページ，東京：世界思想社.

前川啓治

2000 『開発の人類学——文化接合から翻訳的適応へ』東京：新曜社.

2004 『グローカリゼーションの人類学——国際文化・開発・移民』東京：新曜社.

Mayer, Enrique

2002 *The Articulated Peasants: Household Economies in the Andes*, Boulder, Colo.: Westview.

Peisa S. A. C.(eds.)

2004 *Atlas Regional del Perú 13*, Lima.

ポランニー，カール

2003 『経済の文明史』玉野井芳郎・平野健一郎（編訳），東京：筑摩書房.

Roseberry, William

1989 Peasants and the World. In *Economic Anthropology*, Stuart Plattner (ed.), pp.108-126, Stanford: Stanford University Press.

Smith, Gavin

1989 *Livelihood and Resistance: Peasants and the Politics of Land in Peru*, Berkeley: University of California Press.

Taussig, Michael

1980 *The Devil and Commodity Fetishism in South America*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.

鳥塚あゆち

2009 「アンデス牧民社会における土地区分をめぐる変化と共同体のあり方：ペルー南部高地ワイリャワイリャ共同体の事例から」『イベロアメリカ研究』31(1): 1-18.

ウォーラーstein

1987 『資本主義世界経済 I ——中核と周辺の不平等』藤瀬浩治・麻沼賢彦・金井雄一（訳），名古屋：名古屋大学出版会.

Wolf, Eric E.

1957 The Closed Corporate Peasant Communities in Mesoamerica and Central Java.

Southwestern Journal of Anthropology, 13(1): 1-18.

1959 *Sons of the Shaking Earth*, Chicago : University of Chicago Press.

古川：利益追求と村での協調意識